

笑はふとしたら、頬の筋肉がヒキツツて笑へなかつた。

川崎の辻潤の所へ行つた。コシマ、キヨが茶碗にめしを少し宛ついでお給仕した。晚陶山と三人で渡の所へ行つて、細君が留守だつたので、引つ張り出して酒を飲みに行つた。

渡が酔つ拂つて反吐を吐いた。陶山は往來の土管を轉ばした。

二宮で降りれば、無想庵は停車場から右へ折れるんだと辻潤が言つた。

山の根の畑の中のトタン屋根の平家だ。門札に中平としてある。格子をあけるとリンが鳴つて、古くさい小母さんのやうな感じのする女が出て来る。

『僕は高橋ですが、無想庵居られますか』

『今休んで居りますが』

奥へヒツコム。『お上り下さい』と言つたので上つて唐紙をあけると、直ぐ次の間に無想庵は布圍をはね上げて、ツル／＼と膝を掻き合はせてゐた。

机の上をめがねがあつたので、『目が悪るいのですか』と聞くと、『十五度だ』と言つた。

『三十過ぎの人で文學士だろうと思つてゐた、此の間は葉書ありがとう』